

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.91

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2026年3月

主な記事

奄美プロジェクト（鈴木英治）	p1
「ほこらしゃ奄美音楽祭」（第1～3回）が問いかけたこと（原田敬子）	p3
島嶼研シンポジウムを開催	p6
「国際島嶼研究拠点形成」に向けた国際的連携構築	p9
フィールドこぼれ話「かけがえのない与論島暮らし」（北之坊誠也）	p10
連載 世界島めぐり 第十三回「枝手久島」（菊池隼人）	p11

奄美プロジェクト「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」について

鈴木英治

（国際島嶼教育研究センター）

国立大学法人は6年単位で中期計画を立てて、その実現に努力することになっています。令和4年度（2022年度）から第4期中期計画が始まりました。その計画の中にある鹿児島大学のミッション実現戦略分事業の一つとして「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」を、国際島嶼教育研究センター（島嶼研）と理工学研究科（理工研）が共同して開始しました。計画期間の4年間に過ぎた2025年度末までに、プロジェクトで実施した内容をここでは紹介します。タイトルにある「生物と文化の多様性保全」は島嶼研が、「地方創生」は理工研が担当しています。島嶼研の活動は、平成27年（2015年）から始まった3回の特別経費プロジェクトによる奄美群島での生物多様性保全に関わる研究教育活動を基礎として、それをさらに継続・発

展させるものでもあります。

多様性の保全を目指すので対象も多様になります。しかしその中でも重点を置くべき分野があります。本プロジェクトでは、「多様性のモニタリング」、「多様性保全上の問題への対策」、「将来予測」の3つの分野について重点的に研究を進めることとしました。「多様性のモニタリング」のために、2021年から2023年にかけて世界自然遺産地域に400㎡の植物の調査区を30個設定しました。この第一回目の調査結果を主に植物と地形・伐採からの経過年数の関係について解析し、鶴川先生らによって2025年に論文として発表されました。多様性の長期変動のモニタリングが目的なので、初めの調査区を作った2021年から5年が経過した2025年に全調査区で第2回目の樹木の再測定を行いました。今後5年ごとに再測定が行われ

(2) 島嶼研だより No.91

るでしょう。調査区に訪れる動物を写すカメラトラップと鳴き声を記録する装置を設定して、動物の変化を継続的に記録しています。奄美の河川には固有種のリュウキュウアユが生息しています。その個体数変動についても毎年調査しています。「多様性の保全上の問題への対策」として、アマミノクロウサギによる柑橘類の食害への対策があります。食害を受けている農家に協力してもらって防除の方法を研究し、実際に使ってもらっています。またノヤギが遺産地域で増加して自然植生への食害が問題となっています。ただしまだその被害状況やどれくらいノヤギがいるかもよくわかっていないので、その分布状況調査を行っています。「将来予測」としては地球全体の温暖化の植物への影響について調べています。奄美大島と徳之島の標高600mを越す高地があり、そこには固有植物種が分布していますが、温暖化が進むとそれら固有種が絶滅する可能性があります。植物の垂直分布を詳細に調べ、絶滅する可能性がある種類について検討しました。

多様性が高い奄美では当然ながら上記の3分野では対象とならない生物が多数分布しています。また文化の多様性も3分野に含まれませんが重要な課題です。それらの研究もおろそかにはできないので、2023～2025年度には研究課題を島嶼研の兼務教員に募集して、合計26件の研究に費用の補助を行いました。奄美の多様性関係の査読論文が2025年9月までに133編、無査読論文が38編発表されましたが、これらの研究に本プロジェクトが多少なりとも貢献したでしょう。

研究成果の地元への還元も重要な課題です。シンポジウムを奄美大島で3回開催し、参加者数は対面が100名以上、Web参加が100名以上となりました。「島めぐり講演会」は8回開催して合計187名の参加者があり、「分室で語りましょう」は21回開催しています、奄美テレビおよびYouTubeによる情報発信は10回行い

ました。戦後奄美群島がアメリカ軍政下にあった時にアメリカ人の人類学者が撮影した多数の写真を整理して写真展を開き、約1000名の来場者がありました。実際に生物に触れてもらうための植物観察会は24回開催して約400名の参加者があり、海の生物観察会は9回実施して152名の参加者がありました。2025年度末には、今までの成果を紹介する「奄美の生物多様性と人々の暮らし」というタイトルの260頁オールカラーの一般向けの図書を発行します。

奄美で以上のように数多くの教育研究活動が続けてきましたが、それらは奄美の方々の協力によって成し遂げられてきました。協力してくださる方は奄美に来た大学のスタッフについて知ることはあっても、鹿児島大学そのものについての知識は多くありません。鹿児島大学についてよく知ってもらうことは今後の相互交流に有益であろうということで、「鹿児島大学キャンパスワークショップ」として奄美の方を大学に招待して、大学を見学してもらい、意見交換会を開くことにしました。2024年12月17日～18日と2026年1月27日～28日の2回行いました。2回とも奄美から約10名、鹿児島大学スタッフが約30名参加し互いの活動を知ることができて、有意義な企画となりました。本プロジェクトは2027年度まであと2年間続きます。6年間のプロジェクトのまとめとなりますが、皆様のご協力をお願いいたします。



2024年12月17日ワークショップを終えて

寄稿

「ほこらしや奄美音楽祭」(第1～3回)が問いかけたこと

原田敬子

(作曲家、東京音楽大学教授、鹿児島大学客員教授、同島嶼研客員研究員)

奄美大島で令和4(2022)年度から3か年連続開催された大型音楽祭「ほこらしや奄美音楽祭」(主催 鹿児島県、奄美大島五市町村。総合プロデュース 吉俣良氏、企画制作・運営 (有)アーマイナープロジェクト。全3回の事業費約5400万円)を振り返り、筆者によるリハーサルおよび公演の見学、関係者および観客へのヒアリングを元に振り返る。

まず経緯と事業費について。2021年、鹿児島県が申請していた文化庁「文化芸術創造拠点形成事業」採択が内定(補助金:約627万円)し、県から奄美市(教育委員会内担当課)へ実施の打診あり。その総予算規模と企画案(島外から奄美大島にオーケストラを招き、島唄者と共演)を検討した結果、市教委の担当課が企画運営することは難しいと判断、県に回答した。その後、県から説得があり、奄美大島五市町村での実施が決まり、地元の民間制作会社(有)アーマイナープロジェクト(以下AMP)が企画制作・運営の業務委託を受けた。島外オーケストラ招聘実現のため、加えて東京の一般社団法人も制作に従事した。このオーケストラ招聘は全3回行われ、事業費の約1/2を占めた。ここで、文化庁の当該補助金についての文言を確認する。

“地方公共団体が主体となつて行う文化芸術創造拠点の形成に向けた取組を支援することにより、地方公共団体の文化事業の企画・実施能力を全国規模で向上させるとともに、我が国の文化芸術の基盤を形成してきた多様で特色ある文化芸術の振興を図り、ひいては地域の活性化にも寄与することを目的としています”(出典:令和4年度文化芸術創造拠点形成事業/文化庁HP)

国内の状況に目を向けると、地域を拠点とし、地域外の大規模補助金を得て実施する音楽祭は少なからず前例があり、地域活性化に寄与、補助金を継続的に得ている事例も複数ある。「ほこらしや奄美音楽祭」の文化庁補助金が、主催側の見込みに反して開始年(令和4年)限りだった理由は、文化庁が求めている内容を満たしてると言えないとのことだった。筆者の考察は次の2点である。1.総予算に対して、島外オーケストラ招聘に係る費用(前述のとおり、制作費別)を鑑みると、今後、自治体での継続は考えにくいこと、つまりこの内容を核とした文化芸術拠点を形成しえないのではという点。2.文化庁が掲げる「文化芸術創造」という文言に留意すると、本音楽祭の核だったオーケストラの曲目およびオーケストラ×島唄の新曲は、文化芸術「創造」といえるか?という点。そもそも芸術創造の定義を、私たちは学校教育で学ばない上、日本では甚だ曖昧である。西洋のオーケストラだから全て芸術「創造」ではない。また、民謡の旋律にポップス調のハーモニーを付する編曲は、古くは昭和30年代から始まったが、その時代の聴衆の耳に親しみやすいというメリットがある一方で、一体どの地域の民謡なのか、多彩多様な「地域」の民謡個々のアイデンティティを不明瞭にしていると感じるのは筆者だけだろうか。料理に例えれば、石狩鍋もきりたんぼも鶏飯も、西洋出汁で作るようなものではないか。

話を戻すと、第2回目は文化庁の補助金に代わり、五市町村が拠出を決め(約600万円)、当初予算を補正(約2500万円→約1840万円)、そしてやむなく入場料を上げた。3年目は一般財団法人 地域創造(総務省関係)の補助金(460万円)を得て2年目とほぼ同じ予算規模で無事実施した。しかし本意ではなかった入場料アップは、入場者数を目に見えて減少させた(第1回1255名/第2回1001名/第3回828名)。

以上の現実を知つてなお、本音楽祭は別の次元で意義深かった。企画の要 AMP代表取締役の麓氏は「島(の人々)に何を残せるのかを最優先に考えた」。全体を3部構成(+オーケストラ奏者の学校訪問による指導)とし、地元のアマチュアオーケストラにプロとの共演機会を与え(第1部)、伝統的な島(シマ)唄と現代の実践を対比させ(第2部)、各回の最後に、奄美大島が世界に誇る個性的な若手～中堅の唄者を抜擢、これまでにない規模(オーケストラとの共演)の機会を実現。これにより奄美の島(シマ)唄は、代用のきかない無形文化であることが、抜擢された20～30代の奄美大島出身の唄者によって証明された。筆者のヒアリングでは、人生初、オーケストラを聴いた70代男性は感涙。古い島唄ファンの70代女性は「唄は上手いけどなつかしくないね。でも感動で涙がでたんです」と。素直な気持ちで音楽をありのまま享受する心。島(シマ)唄のことになると思う議論にまで発展する熱い人々の存在。今はまだ「なつかしくない」と感じる人々がいるが、その感覚と共に言語が消えゆく時、唄はどうなるのだろう。継承は唄者だけでは成り立たない。様々な人々が少しずつ心を寄せることで、生きて唄い継がれるだろう。引き続き継承の動態記録を続けていきたい。

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第 253 回

2025 年 12 月 15 日

南西諸島の有毒ウニの共生者

山守瑠奈

(京都大学瀬戸臨海実験所)

ウニは鋭い棘を持ち、その棘のすき間にはさまざまな共生者が知られる。例えば、魚類のヘコアナは泳ぎながらガンガゼ類に擬態するほか、ハナゴウナ科貝類のように寄生的な種も数多く生息する。ウニ類は旺盛な藻類食者として知られるが、ナガウニ類やタワシウニ類など、一部の種は歯や棘を用いて岩盤に穴を掘る。私はこれまで、ウニ巣穴の中には固有の住み込み共生物相が形成されることを明らかにしてきた。また、その住み込み共生者の中にはハナザラなどの特異的な種が含まれ、それらはウニに強く依存した生態を持つこともわかった。また、数あるウニの中でも、ガンガゼ類をはじめとした有毒ウニ類には特に変わった生態を持つ共生者が見られる。例えば、ガンガゼモドキの殻の上に共生するガンガゼタマエボシは自らの体の一部をウニの殻に差し込み、ウニの殻の形を改変してシェルターのような構造を作る。さらに、ガンガゼ科のウニの口器（アリストテレスのランタン）の中には、ランタンノタネビというごく小型の甲殻類が住む。本講演では、これらのウニの共生者について紹介する。



山守瑠奈 氏

第 254 回

2026 年 1 月 26 日

龍郷町の秋名のアラセツ行事に関する覚書

町 泰樹

(鹿児島高専一般教育科)

奄美大島龍郷町秋名では、旧暦 8 月の初丙の日に、ショチョガマと平瀬マンカイが行われる。ショチョガマは日の出前から明け方にかけて行われ、集落の田園地帯を望む山の中腹に建てられたショチョガマ（前方 2 本の支柱で支えられた片屋根の藁葺小屋）に稲魂を招き、男性たちがショチョガマの屋根を揺らしながら倒壊させる行事である。平瀬マンカイは、昼過ぎから夕方にかけて行われ、海岸にて男女らが向かい合う 2 つの岩の上で唄を掛け合い、海の彼方からやってくる稲魂を招く行事である。これらを合わせてアラセツ（新節）行事という。

本発表では、2025 年 9 月に観察したアラセツ行事について報告し、先行研究を整理・引用しながらアラセツ行事がどのようなコスモロジーをもつ行事であるかを検討する。また、現在のアラセツ行事は、例えばショチョガマの設営に集落外の人手を頼りつつ、ショチョガマの屋根に集落外の人びとが乗ることができるなど、その一部を集落外に開放している。また、国指定の重要無形文化財に指定していることから、集落内外から人びとが集まる機会にもなっている。こうした現状を踏まえたうえで、観光資源としての側面や伝統文化の継承のあり方についても検討したい。



町 泰樹 氏

第 255 回 2026 年 2 月 16 日

奄美大島宇検村における地域発信型観光の

取り組み

新元一文

(一般社団法人巡めぐる恵めぐる)

本発表では、奄美大島宇検村で取り組んでいる「地域づくりを目的とした観光」の実践について紹介する。一般的な着地型観光は、旅行会社を介して商品化され販売される際に、市場ニーズに合わされることも多く、結果として本来表現したい地域固有の暮らしや文化が表層的にアトラクションとして消費されがちである。宇検村では、こうした課題意識のもと、観光客の要望に地域を合わせるのではなく、自然環境とともにある集落の暮らし、地域が大切にしてきた「環境文化」を軸にした体験型観光を展開している。

具体的には、地域住民自らが語り手・担い手となり、暮らしの中にある「足元の宝」を体験として提供する。集落がホストとなり受け皿を造る行程を経ることで、改めて地域への誇りを醸成するとともに、関係人口の創出につなげている。また、宇検村観光物産協会や株式会社元気の出る公社旅行(村内旅行社)、さらには島外の関連組織を連携させ、企画・募集・受入・案内・発信までを地域内で完結させる仕組みを構築することで、市場ニーズに過度に依存しない地域発信型の観光モデルを実施している。本発表では、これらの事例を通して、観光を経済効果だけでなく、地域を持続的に支える基盤として捉える可能性について考察する。



新元一文 氏

第 256 回 2026 年 3 月 9 日

奄美大島のスモモ「花螺李」なぜ大和村ではスモモの栽培が受け入れられたのか？

香西直子

(鹿児島大学農学部)

兼城糸絵

(鹿児島大学法文学部)

スモモはバラ科サクラ属スモモ亜属に属する果樹である。日本ではニホンスモモが広く栽培されており、奄美のスモモである「花螺李」もその一種として位置付けられる。しかし「花螺李」は古くから奄美に存在していた果樹ではなく、1935年に台湾から導入された新しい果樹である。そのような新しい果樹であるにもかかわらず、「花螺李」はいまや地域を代表する特産物のひとつとなっている。

スモモの一般的な特性として、休眠性の落葉果樹であることや自家不和合性の品種が多いことがあげられる。特に、冬季に一定の低温を経験しないと発芽しないという性質を有しており、そのため比較的寒冷な地域で栽培されることが多い。日本におけるスモモの産地が山梨県や長野県であることは、スモモの生態的特徴と整合的である。しかしながら、亜熱帯気候に位置する奄美大島においてスモモが安定して生育・結実している理由については、これまでほとんど調査されてこなかった。また、従来スモモ栽培が行われてこなかった地域において、スモモという「外来作物」が広く受容され定着した社会的背景についても検討されてきたとは言い難い。そこで、本発表では大和村で実施した現地調査の成果に基づきながら、「花螺李」が奄美に定着し得た要因について考察する。



兼城糸絵 氏(左)と香西直子 氏(右)

島嶼研シンポジウム 島の貴重なカンキツ —その特長と可能性を探る—

カンキツはインド・アッサムから中国・雲南を起源とし、主にその東側に生息域を拡大しました。東端に位置する日本は中新世(2,300 万年前～530 万年前)に日本海が形成されてユーラシア大陸と分離したため、自生種の「シクワサー」と「タチバナ」は他地域には存在しない固有で貴重なものです。その後、南西諸島ではシクワサーと外来種との交雑、そして交雑種どうしの交配などにより、さまざまなカンキツが誕生しました。例えば、喜界島では「クリハー」「ケラジミカン」「シーカー」「トーカー」「フサー」などが栽培・利用されています。本シンポジウムでは、奄美・沖縄の在来カンキツの特長について最新の知見を紹介するとともに、島おこしの材料としてより一層活かすため、在来カンキツの新たな可能性を皆さまと一緒に考えたいと思います。

日 時：2025 年 11 月 29 日 (土) 13:30～17:00

場 所：喜界町役場 多目的室 (〒891-6292 喜界町大字湾 1746 番地)

開催方法：ハイブリッド (Zoom；先着 90 名、視聴のみ可能)

主 催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

後 援：喜界町、奄美群島広域事務組合

【プログラム】

13:00 受付開始

13:30 開演 司会 山本宗立 (鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

13:30～13:40

趣旨説明 山本雅史 (鹿児島大学農学部)

13:40～14:20

山本雅史 (鹿児島大学農学部)

「奄美・沖縄の在来カンキツについて最近わかったこと」

14:20～15:00

金城秀安 (沖縄県大宜味村シークワサー産地振興協議会、H.K.ラボ)

「琉球列島在来カンキツ類の起源」

15:00～15:15 休憩

15:15～15:55

坂尾こず枝 (鹿児島大学農学部)

「南西諸島在来カンキツの魅力とこれから—地域に根ざしたチカラと活かし方—」

15:55～16:10 休憩

16:10～16:55 討論

16:55～17:00 閉会の挨拶

【要旨】

山本雅史 (鹿児島大学農学部)

「奄美・沖縄の在来カンキツについて最近わかったこと」

奄美・沖縄にはシクワサーをはじめ、さまざまなカンキツ遺伝資源が自生し、または栽培されている。近年、これら在来カンキツの分布、来歴や特徴について、さまざまなことが明らかになってきた。この地域の多くの在来カンキツ、カーブチーやケラジミカン、ロクガツミカンなどは自生のシクワサーと海外から導入されたクネンボまたはダイダイとの雑種であることが DNA 分析によって解明された。また、多数の島における現地調査によって、在来カンキツの分布についての情報も得られた。例えば、カーブチーやロクガツミカンは幅広く分布しており、島じまで異なる名称で呼ばれていた。一方、ケラジミカンのように限られた島でのみ確認されたものもあった。これらのうちシクワサーやカーブチーなど数種類の在来カンキツの果実には生活習慣病などの予防効果の高いポリメトキシフラボノイドが大量に含まれていた。これらの結果から、奄美・沖縄の在来カンキツは、他の地域には存在しない固有で貴重な遺伝資源であることがわかった。さらに、古くから生活に密着して利用されてきた点で、文化資源としても重要である。

金城秀安 (沖縄県大宜味村シクワサー産地振興協議会、H.K.ラボ)

「琉球列島在来カンキツ類の起源」

シクワサーは、タチバナと中国由来のマンダリンの自然交雑によって生まれたと考えられる。さらにその雑種間で交雑が行われ、イシクニブーのような遺伝子型のカンキツができた(平井正志)。シクワサーの系統である大宜味クガニー、勝山クガニー、カーアチー (マヤーガー)、カービシー、フスブター、ミカングワー、ヒージャークニブー、イシクニブーおよびタチバナには、いずれも日本マンダリンを特徴づける遺伝子が見られること、イシクニブー以外の個体については、中国由来のマンダリンの特徴が見られる (山本雅史)。

現在、沖縄科学技術大学院大学、カルフォルニア大学、フロリダ大学、アメリカおよびスペインの研究所以とカンキツ国際研究チームで東アジア、琉球、日本のカンキツ来歴類縁関係を追究している。その成果が、2021 (令和 3) 年 7 月 26 日、Nature Communications に掲載された。今回、これまで田中の分類でタニブターシクワシャー (タチバナ群) と称した個体が、琉球列島で 220~280 万年前、中国由来のマンダリンから分化したことが遺伝子解析の結果判明した。

これまで、日本最古のカンキツと言われたタチバナとシクワサーは、4~20 万年前にタニブター (仮の学名 *Citrus ryukyuensis* と命名) が関与し誕生したことがわかった。タチバナの伝来は、朝鮮半島経由の北ルートと琉球からの南ルートが考えられてきたが、今回の研究で琉球ルートを裏付ける発見となった。

現在のところ、タチバナの片親は不明 (中国由来のマンダリン?) であるが、シクワサーの片親は、勝山イシクニブー (イシクニブーと別種、マンダリン *Citrus reticulata*) と称されている中国湖南省由来の莽山野橘の一種で、正逆交雑でシクワサーのさまざまな変異系統が生まれたと考える。

琉球王国の大交易時代 (8~12 世紀) にアジアから導入されたクネンボ、ダイダイ、ブントアン等とタニブター、シクワサーが交雑しつつ北上し、日本各地で種々のカンキツが誕生したと予想する。今後の研究により、国産カンキツの起源が解明され、カンキツ史が書き換えられるだろう。

坂尾こず枝（鹿児島大学農学部）

「南西諸島在来カンキツの魅力とこれから—地域に根ざしたチカラと活かし方—」

南西諸島で栽培されている在来カンキツ類は、固有の遺伝的背景を有する貴重な植物資源である。一方で、摘果などにより未利用のまま廃棄されるケースも多く、資源の有効活用が課題となっている。そこで本研究では、将来的な地域産業への応用を見据え、これら在来カンキツ類の「機能性」に着目し、高付加価値化を目指した検討を行った。

これまでの研究から、南西諸島在来カンキツ類の果皮にはノビレチンやタンゲレチンといったポリメトキシフラボノイド (PMFs) が豊富に含まれており、酸化ストレス軽減や抗メタボリックシンドローム作用などの生理活性が報告されている。

本研究では、南西諸島在来カンキツ類を機能性資源として多面的に評価することを目的とし、①血糖値上昇抑制効果、②皮膚保護作用、③抗アレルギー効果、④抗がん作用の四つの観点から機能性を検証した。さらに、それぞれの機能に関与する可能性のある成分の推定を、NMR メタボローム解析等の手法を用いて行い、各品種が有するユニークな機能性の特定を試みた。

その結果、「喜界ミカン」に顕著な血糖値上昇抑制効果が認められたほか、屋久島の「コズ」には優れた皮膚保護作用が確認された。これらの成果から、南西諸島在来カンキツ類は、地域特有の機能性資源としての有望性を有することが示唆された。



趣旨説明を行う山本雅史先生



講演を行う金城秀安先生



講演を行う坂尾こず枝先生



総合討論の様子

「国際島嶼研究拠点形成」に向けた国際的連携構築

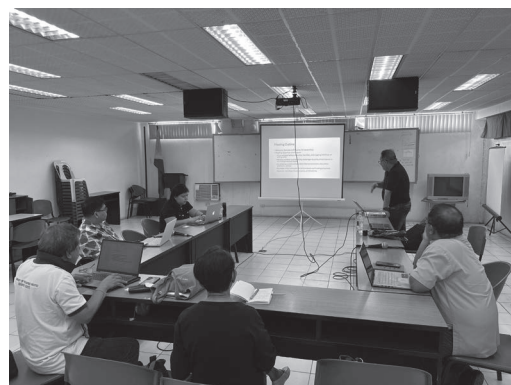
本センターは長年にわたり、地域課題の解決を起点とした国際共同研究を推進してまいりました。特に令和3年度から5年度にわたる日本学術振興会（JSPS）研究拠点形成事業では、東南アジア島嶼国との間に強固な信頼関係を築き上げることができました。本年度、私たちはこの成果をさらに発展させ、世界に開かれた「国際島嶼研究拠点」の構築へと着実に歩みを進めています。

このたび、令和7年度経営戦略経費（学長裁量経費）「国際島嶼研究拠点形成に向けた基盤強化」の助成によりマレーシア・サバ大学とフィリピン・フィリピン大学ビサヤ校、インドネシ・パティムラ大学から国際島嶼研究拠点への鍵を握る各大学の諸先生方を本学へお招きしました。また専任教員が各3大学を訪問し、連携に向けた意見交換を行いました。直接の対話を通じ、各国の島嶼部が直面する温暖化や環境変化といった共通課題を再確認するとともに、本学の研究体制について国際的な視点から極めて示唆に富むアドバイスをいただきました。先生方からの客観的な評価は、私たちの強みを再認識させると同時に、真の国際拠点化に向けた具体的な課題を浮き彫りにする貴重な指針となりました。これらの活動を基盤として、国際島嶼研究拠点形成に向けた国際的連携を一層深めていきたいと思っております。3大学からのアドバイスは本センターNews Letter No 37に掲載しています。

（センター長 大塚 靖）



鹿児島に招聘された3大学の先生方



フィリピン大学ビサヤ校での意見交換の様子



サバ大学での意見交換の様子



パティムラ大学での意見交換の様子

～フィールドこぼれ話～

奄美の海で始まったサンゴ研究

北之坊誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室）

私が物件探しのために初めて奄美大島を訪れたとき、最初に目にした光景は少し強烈なものでした。船越海岸では打ち上げられた鯨の解体作業が行われており、民間団体や獣医師、鹿児島大学の研究者など、さまざまな立場の人たちが集まり、協力して作業をしていました。私も急遽、鹿児島大学の牧特任研究員に声をかけていただき、その作業に参加することになりました。奄美での最初のフィールド体験が、まさか鯨の解体になるとは思ってもいませんでした。そのあと町を歩いていると、もう一つ印象的な風景に出会いました。町の繁華街の横を流れる川には缶やプラスチックごみが多少あり、見た目は決してきれいとは言えません。しかし川の水は透明で、小魚が群れになって泳いでおり、河口付近では、多くの貝類が生息していました。人の暮らしのすぐ隣に、生き物の世界がしっかりと残っている。その光景は、どこか奄美という島を象徴しているように感じられました。

その年の2024年5月、私は鹿児島大学国際島嶼教育研究センターのサンゴをはじめとする水圏生物の特任研究員として、鹿児島県奄美市にある奄美分室に着任しました。奄美群島の生物多様性については、文献や研究者仲間から「奄美群島のフィールドは最高」と聞いていましたが、実のところそれまで私は奄美群島で研究をしたことがありませんでした。着任して間もなく、まずは自分の目でこの海を知ろうと思い、島内のさまざまな海域に潜り、サンゴの生息状況を見て回りました。湾の奥と外洋に面した場所では海の景色がまったく違います。波の強さや水の透明度、見られるサンゴの種類や密度は場所によって大きく異なり、潜るたびに海の景色が変わっていきました。同じ奄美の海でも、環境の違いによってサンゴ群集が大きく変わることに改めて驚かされました。いくつかの海域を潜っているうちに、ふと「ここなら、前からやりたかった研究ができるのではないか」と思いました。特別な装置も大きな予算も必要ありません。必要なのは体力と観察力です。そんなひらめきが、奄美の海の中で生まれました。そこで、サンゴの配偶子（精子と卵）を使った研究を始めようと考えました。しかし、着任したのは5月。6月にはサンゴの産卵が始まります。この機会を逃すわけにはいきません。慣れない土地での調査と準備を同時に進めることになり、文字通り時間との勝負でした。調査ではカヤックで海に出て、そこから潜ってサンゴを観察します。ところが、私が海に潜っている間、カヤックは当然ながら「空」のまま海面に浮かんでいます。海洋展示館の砂浜は、奄美市街にも近く、多くの人を訪れる場所です。一方でサンゴの多様性も非常に豊かで、重要な調査地の一つでもあります。そのため、沖合に「誰も乗っていないカヤック」がぼつんと浮かんでいる様子は、少し不思議な光景だったと思います。ある時、心配した方が通報し、警察や海上保安庁の方々が様子を確認しに来ることがありました。特に事故でも事件でもなかったため、その時は私の名前とカヤックの特徴を伝えただけで、大きな騒ぎにはなりません（今では、カヤック調査中看板を設置しているためか、通報されることはなくなりました）。奄美では海が人々の生活のすぐ近くにあるのだと、改めて感じる出来事でもありました。

こうして調査を続けていると、奄美の海では研究だけでなく、思いがけない出来事にもよく出会います。鯨の解体から始まり、無人カヤックの通報まで、奄美でのフィールドはにぎやかです。それでも、こうした出来事も含めて、この島で研究する面白さなのだと感じています。



写真1. 船越海岸に打ち上げられた鯨



写真2. サンゴ調査に使用しているカヤック。潜っている間、海面には「空のカヤック」が浮かぶことになる。

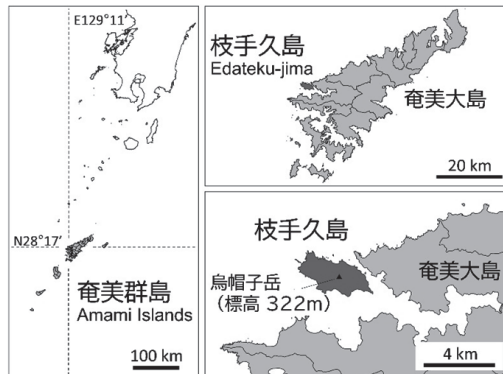
「世界島めぐり」

第十四回 奄美群島の無人島 枝手久島 (Edateku-jima Island, Amami Islands, Japan)

菊池 隼人 (鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室)

枝手久島は、奄美大島の北西海岸（宇検村）に隣接する、面積 5.7 km² の小島である。枝手久島島は無人島であり、過去には奄美大島から通って耕作が行われていたものの、現在は行われておらず、レジャー目的での上陸が時折みられる。

枝手久島は、隣接する奄美大島と同様に、常緑広葉樹林に覆われた山がちな島であるにも関わらず、生息する生物についての知見は乏しい。そこで 2025 年 10 月から 2026 年 2 月にかけて枝手久島に上陸し（写真 1）、陸生哺乳類および植物の生息状況を調べた。その結果、枝手久島には奄美・沖縄に固有の哺乳類が生息することが明らかになったものの、野生化したヤギも撮影されたため（写真 2）、今後詳しい調査が求められる。



地図



写真 1 枝手久島の遠景



写真 2 撮影されたヤギ (矢印)

編集後記

奄美も少しずつ暖かくなってきました。海での調査も気持ちよくなっています。(KK)

島嶼研だより No 91 令和 8 年 3 月 31 日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>
